

8. トウガンの新しい病気「実褐斑病」 (情報)			
[要約] 露地栽培トウガンの果実に発生したかさぶた症状の障害は、リゾクトニア属菌による新病害で、「実褐斑病」と命名する。			
研究室名	病虫研究室	連絡先	0869-55-0543

[背景・ねらい]

岡山県南部の露地栽培トウガンの果実にかさぶた症状の障害が発生したので、原因究明を行い対策に資する。

[成果の概要・特徴]

1. 6月中旬ごろから発生する。果実の症状は初め、茶色でややへこんだ病斑を生じた後、次第にカルス化して盛り上がり、数 mm から大きいもので 3～5 cm で不定形の淡褐色斑を生じる(図 1、2)。激しいものでは果実に数十個のかさぶたが形成されるが、褐変はごく表層部に限られ、果実の腐敗には至らない。また、茎、葉には症状が認められない。
2. 果実の病斑からは *Rhizoctonia* 属菌が高率に分離された。分離菌はいずれも有傷接種でトウガンの果実に原病徴が再現され、無傷接種でも再現される場合が多かった(表 1)。また、接種部位からは接種菌と同一の菌が再分離された。
3. 本菌は PDA 培地上で初め灰白色、やがて茶褐色を呈する菌叢であり、分生子を生じず、黒褐色、球形ないし不定形で大きさ 2～3mm の菌核を形成した。10～35℃で生育し、最適生育温度は 25～30℃であった。PDA 培地上での菌糸の形態の特徴は、分岐点近くに隔壁を有し、分岐点でくびれており(図 3)、菌糸幅は 6.0～9.0 (平均 8.4) μm であり、核染色法による菌糸 1 細胞中の核数は多核であった。以上の形態から、本分離菌を *Rhizoctonia solani* と同定した。

以上の結果から、本病害を「実褐斑病」と命名する。

[成果の活用面・留意点]

1. 果実が土壌に直に接している部分に発病が多い。
2. 高温多湿条件は本病の発病を助長する。
3. 本病害に対して、トリクロホスメチル粉剤 (商品名：リゾレックス粉剤) が登録申請中である。

[具体的データ]



図1 「実褐斑病」の症状



図2 病斑の経時的変化

左：初期症状（ややへこんだ病斑）

右：後期症状（盛り上がったかさぶた状の病斑）

表1 トウガンに対する分離金の病原性

供試菌		有傷	無傷
R. solani	04-T-1 株	2/2 ^z	1/3
R. solani	03-T-4 株	2/2	2/2
R. solani	03-T-7 株	2/2	2/2
対 照		0/3	0/3

^z 発病果実/接種果実



図3 PDA培地上での03-T-7株の菌糸形態

[その他]

試験研究課題・事業名：マイナー作物病害虫の発生生態の解明及び防除対策

予算区分：国補（病害虫管理体制整備事業）

研究期間：平成16～18年度